

# 東国の中世村落における開発と災害

Development and Disaster in Villages in the Eastern Provinces in the Medieval Period

原田信男

はじめに

①中世村落と開発

②中世村落と災害

おわりに

## 【論文要旨】

古代や近世のような統一権力の場合とは異なり、地域的な分権制を原則とする中世社会では、国郡を単位とするような大規模な土木工事が、行いにくい政治的環境下にあった。こうした中で、小稿では中世東国において、どのように耕地の開発が行われ、どのような災害が惹き起こされていたかを問題としたい。まず中世村落における開発については、これまで指摘されたような山間部の谷田を中心とするものではなく、平地部の沖積地においても早くから開発が行われていた。例えば鎌倉期には、幕府や荘園領主が局地的に労働力を動員して、利根川などの沖積低地悪水地帯にも人工的に堤防が築かれている。洪水という災害から集落と耕地を守る人工堤防の造築を行うとともに、用水路を確保しつつ水田開発の進展が、領主側の強い意志によって図られたのである。なお人工堤防や用水路などの土木工事に關する技術や知識は、寺院の僧侶たちによって主に伝えられたと考えられる。一方災害については、会津盆地の『塔寺八幡宮長帳』『異本塔寺長帳』や、富士山北麓の『妙法寺記』（『勝山記』）など、地域的に連続した史料が残る。これらから中世東国における災害の性格をみれば、近年流行している気象変動論に基づく小氷期による冷害が主体なのではなく、風水害が最も多く時には旱害なども加わり、さらには疫病などが蔓延して被害者が増大したことが窺われる。さらに中世における飢饉は、異常気象や天変地異などによる自然の災害に加えて、それぞれの地域における人為的な収奪の問題も大きかったが、基本的には地域ごとの自然発生的な要素が極めて強かった。確かに中世社会においては、統一的な権力によって大規模な開発が進められたわけではなく、自然現象を克服する技術は相対的に低かった。しかし、代わりに全国規模の経済・流通システムに組み込まれ、藩単位で飢饉に追い込まれる近世に較べれば、被害の程度も比較的小規模に留まりえたものといえよう。